

氏名	つ　　い　　ふ　　み　　お 筒　井　史　緒
学位(専攻分野)	博　士（文　学）
学位記番号	文　博　第　401　号
学位授与の日付	平　成　19　年　3　月　23　日
学位授与の要件	学　位　規　則　第　4　条　第　1　項　該　当
研究科・専攻	文　学　研　究　科　思　想　文　化　学　専　攻
学位論文題目	ウイリアム・ジェイムズ思想 ——経験と超過の狭間で——

論文調査委員	(主　査) 教　授　氣　多　雅　子	助教授 杉 村 靖 彦	助教授 芦 名 定 道
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

ウイリアム・ジェイムズ（1894-1910）は生理学からそのキャリアをスタートさせたが、心理学、哲学、宗教学、はては教育学に至るまで、実に多岐にわたる諸分野で精力的に活動した。その業績の一つ一つは、いまなおそれぞれの分野で新しい刺激をもたらし続けている。しかし、多彩な輝きのそれぞれが強い光を放っているまさにそのために、ジェイムズ研究は狭い分野の専門研究に終始するという傾向が強い。論者は、ジェイムズ思想を真に理解するために、その思想を一つの有機的全体として再構成しようとする。それが本論文の目的である。

論者によれば、ジェイムズのすべてのテキストには、その思想全体を通底するような或る図式が基本構造として共有されている。この基礎的なヴィジョンの把握なくして、真のダイナミズムを捉えることは不可能である。しかしながら同時に、思想の縦糸が一貫していればいるほど、その横糸、つまり各専門理論同士の相互関係が把握しにくくなる。そこで、生涯を通じて直接経験からのみ出発しそこから人間と世界とを語り続けたヴィジョンの一貫性と、そのつど語り出された理論の多彩さを、いかに調停するか、ということが論者の問題となる。

こうした事情を鑑み、本論文は、ジェイムズ思想の横糸をなす主要な専門理論を整理しつつ、常にその中心を貫いていたヴィジョンを一つの構造として取り出してゆくことを狙いとしている。この目論みを成功させるために、本論文ではジェイムズ思想が三段階に分けて論じられる。

第一章「純粹経験の哲学」では、ジェイムズの基礎的な宇宙論でありジェイムズの形而上学でもある「純粹経験の哲学」に焦点があてられ、彼の思想の基盤となっているヴィジョンが取り出される。この時点で取り出される図式は、きわめて基礎的なものであり、ほぼすべてのテキストに関して適用可能なものである。ミニマムな言い方をすれば、ジェイムズの形而上学的ヴィジョンとは、「純粹経験の哲学」という認識プロセスの哲学を基盤として、「プラグマティズム」という世界生成ヴィジョンを展開するものである。「純粹経験の哲学」によって描き出されるわれわれの生とは、われわれの生がきわめて広い意味での認識経験、即ち「知ること」そのものであり、常にそこにある純粹経験から垂直的に生み出される一連の上昇プロセスだということである。その産出の現場が「純粹経験」と名指されているのである。

その現場から生まれ出る認識の萌芽状態は「感じ(feeling)」といわれ、この「感じ」を基底部としてもつ、厚みをもった人格の構造が「意識の流れ」と呼ばれている。つまり、「意識の流れ」は常にその基底部において「純粹経験」からたちのほり続けるものである。しかしこうしたプロセスは、垂直的な構造をもつのみには止まらない。「純粹経験」は「生の流れ」であり、常に水平的に流れ、変容してゆくものである。生が流れるにつれ、そこからたちのほる「意識の流れ」もまた変容させられ、流れてゆく。「意識の流れ」と「純粹経験」の哲学とは、全体として漸次変化し続ける「われわれ」と「世界」とを描き出す。こうした構造が基盤となることにより、「プラグマティズム」というより広い形而上学的ヴィジョンが基礎付けられると、論者はいう。

通常プラグマティズムという場合、実用主義の真理論としてのプラグマティズムが思い浮かべられるが、論者はジェイム

ズのプラグマティズムを、進展する生成の循環構造そのもの、世界生成のプログラムとして把える。そして、このプログラムが、(1)経験が立ち上がる段階（認識論）、(2)立ち上がった経験がもとの経験母胎へ還って行く段階（真理論）、(3)経験が巻き上がるプロセス（存在論）、という三段階に分けることができると論ずる。その考え方に従えば、真理論＝第二段階が狭義のプラグマティズムと呼ばれるべきであり、これに認識論である「純粹経験の哲学」を加えたジェイムズ独自の存在論全体＝第三段階が広義のプラグマティズムと呼ばれるべきなのである。

この考え方によると、ジェイムズの形而上学とは「生成の現場そのものによって、生成してゆく世界構造を基礎づける」プロジェクトであったということがわかる。この生成する世界構造を論者は「糸巻き構造」と名づける。ジェイムズは「プラグマティズム」という世界生成の大きなうねりを語ったが、そのうねりを生み出す源は、「純粹」な「経験」であり、「純粹経験の哲学」でなければならない。「純粹経験」とは、われわれと世界とが互いに創出し合い、変遷させられ合う、その「開示性」と「動性」そのものを指し、「純粹経験の哲学」とは、そうした動性と開示性とを基盤とすることによって初めて成立する、生成の現場の素描を指している。ジェイムズのプラグマティズムとは、そうしたスケッチを形而上学としてもつことによって初めて成立する、きわめて大きなダイナミズムなのである。われわれは常にこれまでの歴史に規定されつつ、そのなかに潜むオープンな可能性から新しい未来を創り出している。そのように創り出されたものがまた世界に沈殿しては、新たな世界の相貌とわれわれの生とを現出させてゆく——これが最も広い意味でのプラグマティズムであるが、「純粹経験」とはそのようなダイナミズムを生み出す母胎であり、「純粹経験の哲学」とはその母胎からたちのぼる産出を写し取る哲学にほかならない。ジェイムズが常にもち続け、そこをめぐるようにして語り続けた一つの大きなヴィジョンとは、そのような「純粹経験の哲学」を基盤とする「プラグマティズム」という、新しさの沸騰を源泉としそこから循環しつつ巻き上がってゆく、われわれと世界との共同作業による世界生成プログラムだったと解される。

しかしそのように理解したとき、大きな問題となるのは宗教経験の位置づけである。態度としては＜徹底的に経験に依拠＞し、方法としては＜経験を世界の根本質料とみなす＞という「徹底的経験論」の射程は、宗教経験にまで及んでいたというのが論者の見方であり、第一章の基礎的な議論だけではジェイムズ思想の全貌はまだ明らかになってはいないと考える。『宗教経験の諸相』を引き合いに出すまでもなく、ジェイムズが宗教的志向のきわめて強い思想家であることは周知の通りであり、宗教経験は彼の思想において中心的な意味合いをもつ。しかし、宗教経験は「生の流れ」「純粹経験」「知覚の流れ」等、第一章で登場するどの経験概念ともまったく性質の異なるものだとされるため、宗教経験をジェイムズ形而上学のどこに位置づけるかは難問とならざるを得ない。宗教が超自然的な領域と関わるものだ、というただこの一点によって、宗教経験は他のどの経験領域とも峻別されるのである。

第二章「宗教」では、こうした問題意識から、通常経験とは異なる性質をもつとされる「宗教経験」が彼自身の形而上学的ヴィジョンによってどう説明され得るのかが検討される。そして、この問題はジェイムズ思想そのものの成功を問うものでもある。何故ならばジェイムズにとって、宗教経験は看過しがたいのみならず、最重要事項であり、自身の思想において鍵となる位置を占めていたからである。宗教経験を考慮に入れない哲学は、ジェイムズにとってはきわめて不完全なものでしかなく、むしろそうした異質な経験をカウントすることによって哲学は完全なものとなると考えられていた。つまり、この説明の成否に哲学の完成の成否が掛かっていたのである。それは自然的な経験論の改編を迫るものであるかもしれない、しかしもし改編されるならばその改編をも語らねばならない、というジェイムズを突き動かしていた強い義務感を、論者はそこに読み取っていく。

「直接に経験されることのない如何なる要素もその構造内に入れてはならないし、直接に経験される如何なる要素をもその構造から締め出してはならない」という徹底的経験論の要請は、自然的でない経験をも——それが実際に看取される限りは——語らざるを得ないという要請へと、歩を進めずにはいなかった。論者はそのように論じて、ジェイムズの基礎的世界観である糸巻き構造が拡張・徹底されることによって、宗教経験および宗教が経験論内部に位置づけられている、と結論づける。ジェイムズの形而上学的ヴィジョンは「宗教という拡張」までも含み込んだヴィジョンであったというのである。

このヴィジョンの拡張は、さまざまな面においてなされる。まずそれは「深さ」を拡張することによって、「再生経験」が「超自然的でありながら具体的経験である」ことを説明するものである。またそれは検証不可能なものについてもプラグマティックであることによって、「信仰」が「宗教」となることを要請するものでもある。そしてまたそれは意識の重層性

を認めることによって、「宗教」から導かれ得る世界の重層性をも可能な仮説として考慮に入れるものでもある。つまり、「経験論」の基盤であった糸巻き構造は、「宗教的世界観」を「経験論から」説明するものでもあった。確かに、宗教経験および宗教には通常の経験論をはみ出るような要素が多々見られるが、そうした要素も糸巻き構造を拡張することで、あるいはむしろ徹底することで、経験論の内側で理解することができる。そのような意味で、ジェイムズの世界観とは常にグラデュアルな超過を許容し、けっしてはっきりとした限界——「存在様式」においても「可能性」においても——を定めないのであったと解される。「ジェイムズはフリンジの哲学者である」という評価はこうした点を衝くものである。しかし同時に肝に銘じておかなければならないのは、その超過が徹底的経験論の内部から導き得るものに限られており、恣意的な拡張を許すものではないということである。ジェイムズが見出し、余地を残し続けた超過とは、むしろ徹底的経験論に依拠することによって見出されたものであり、「経験論の拡張」といっても決して空虚な仮説ではない。しかしながらやはり、こうした世界観から取り出せる「宗教性」が特定の既成宗教のそれではないことも、またはっきりしている。ジェイムズの宗教性とは、論者がまさに取り出し、「経験論の拡張」として語ったような、通常の経験論の改編を迫らずにはおかない超過そのものなのである。

第三章「倫理」では、そのような超過としての宗教的含意をもつ世界観が、如何に厳しい倫理性をわれわれ生きる人間に課すことになっているか、その経緯を詳細に追っている。ジェイムズのテキストは常に読み手に対して「どのように生きるべきか」を問い続けるものであったが、そうしたダイナミックな倫理性がそのヴィジョンに由来するものであったことが確認される。最終的には、そうした倫理性をもつ形而上学が、個人としてのジェイムズ本人の生き様もっていた倫理性によるものであったことを確認し、その思想全体が一人の人間の生の記録として捉え直される。ジェイムズが語って見せるような世界観は、そこで生きる生身の人間に対し、厳しくも真っ直ぐな肯定力に満ちた生への責任を呼びかけている。論者は、そうした呼びかけがまさに一人の人間としてのジェイムズの衷心から発するものだったことを明らかにする。

結論として述べられるのは次のことである。即ち、ジェイムズもっていた世界観とは、まずは拡張をも視野に入れた糸巻き構造であり、そうした世界観を一可能性として語るメタ・メタフィジカルなスタンスであり、そしてまたそのようなスタンスを己れの生全体を賭けて選択するというきわめて実存的なプラグマティズムでもあったのだということである。

さらに以上のことから、ジェイムズ思想がもつダイナミズムとは、単に動的な構造を下敷きにしているという理由だけではなく、常に自分自身が己れの語る構造に取り込まれていることを自覚し続けていた、という「思想」と「人」とのダイナミックな関係にもあることが明らかになる。ジェイムズは常に、むしろどのような哲学者であっても、あるいは哲学者でなくとも、すべての人間がみな「超過」を犯さざるを得ないという事実を、正面から引き受け続けた思想家であった。ジェイムズ思想は決して、終局的な「答え」としての真理を語ることはない。しかしそれは、いつ如何なるときにもわれわれ人間に課されている「現実」としての真実を語っていた。どんなに時代が進み、どんなに新しい理論が登場しようとも、おそらく人間はいつもジェイムズが描きまた直面したような超過と向き合い、それと戦い続けなければならないであろう。論者はこのように論じて、不断に「自分にはこの思想を語る資格があるのか」と己れに問い続けるジェイムズの構えが、テキストを読むわれわれ自身にわれわれの生を振り返らせ、問いに付させる動性を生み出し続けることを高く評価する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、哲学、生理学、心理学、宗教学など多様な分野に大きな足跡を残したウィリアム・ジェイムズ思想について、一つの有機的な全体像を構築しようとした野心的な試みである。ジェイムズの著作は内容が多岐にわたるだけでなく、その考察の視座が叙述のなかで実証科学的、形而上学的、実存的等、さまざまに揺れ動くところがあり、思想の全体像を見極めることは決して容易ではない。論者は、ジェイムズのすべての著作には共通する図式があると看取り、それを一つの基本構造へと彫琢してゆく。次に、その基本構造をもとにしてジェイムズの宗教理解を解明し、彼の世界観を明らかにする。その上で、彼の思索のスタンスがもっている実存的特質を浮かび上がらせ、ジェイムズ思想の意義を改めて見出してゆく。この三つの手順を本論文の三つの章に配して、論者はジェイムズ思想の全体像を再構成するのである。

本論文の成否は、諸著作に共通する図式を如何に的確に取り出すことができるかということに掛かっているが、論者はそれを丁寧な読解と堅実な思索の積み上げによって成し遂げている。論者によれば、その図式とは三段階からなる世界生成プ

プログラムである。第一段階は、「常にそこにある純粹経験」からわれわれの経験が垂直的に生み出されてくる上昇プロセスであり、この段階は「知ること」の生成として認識論に相当する。第二段階は、垂直的に生み出された経験がもとの経験母胎に還ってゆく下降プロセスであり、この段階は概念がわれわれを望ましいポイントに連れ戻すか否かという問題として真理論に相当する。この上昇と下降は、一方で生の流れを母胎として新しい事実を作成し、他方で新しい事実を生の流れに付け加えてゆくという循環構造を形成する。これが第三段階である。この循環が進展するという仕方で知覚世界の底辺に常に存在している生の流れもまた進展する。個々人のそのつどの経験とその積み重ねとが世界を新しく規定し直していくという、絶えず進展してゆくこの「生の巻き上がり」は、世界生成のプロセスとして存在論に相当する。

このような仕方でジェイムズの思想の基本構造を鮮やかに描出し得たことが、本論文の第一の功績である。また、この基本構造に「糸巻き構造」と名をつけ、その思想のダイナミズムを生き生きとイメージ化した点に、論者の獨創性が認められる。

さらに、この「糸巻き構造」の着想が優れているのは、それを敷衍することによって、通常の経験とは質の異なる宗教経験を説明することができるものとして構想されている点である。論者はそれを「糸巻き構造の拡張・徹底」として論じているが、実質的にはこの論考は、糸巻き構造を構造化以前の広がりへと引き戻し、その広がりが宗教経験の有りようを見定め得る射程をもつことが証される、という内容のものである。それが「拡張・徹底」と言われるのは、糸巻き構造の上昇と下降のプロセスをさらに上方と下方の両方向に拡大させて、そのプロセスそのものがさらに大きな振幅をもって変容してゆく事態として、宗教的人格の生成と外化が説明されるからである。自然的領域の「向こう側」との交渉を通して、宗教的生が新たな実在として世界に付け加わり、世界が少しだけ新たな相貌を見せるという展開は、「糸玉の巻き上がり」のいっそうダイナミックな様相であることになる。この「糸玉の巻き上がり」には、客観的な確実性をもたない個人的なヴィジョンへの個人の超過信念が組み込まれている。

これはきわめて巧みなジェイムズの宗教思想の捉え方である。彼の宗教をめぐる叙述は多面的で一貫性を欠くものであるが、論者はそれが非常に豊かな可能性をもっていることを明らかにした。このような捉え方が可能となったのは、論者の「糸巻き構造」が、ジェイムズのプラグマティズムが内包する形而上学性を的確に概念化し得ていたからである。

また本論文では宗教経験の説明に照準が定められたが、「糸巻き構造」はジェイムズの他の分野の論考を解明する上でも大きな効力を発揮すると予測される。その意味でも、論者のこの捉え方は高く評価できる。

とはいえ本論文にも望まれるべき諸点が見出される。まず、ジェイムズのプラグマティズムの解明に力点が置かれたことで、純粹経験の解明がやや後景に退いてしまった点が惜まれる。純粹経験と「超自然的」な宗教経験との連関はさらに徹底して追究される余地がある。また、ジェイムズ思想の倫理性を論じるにあたって、論者は最終的にジェイムズ自身の超過信念にすべてを委ねてしまっている。それは明らかにジェイムズ自身の自己理解に由来するものであるが、論者の「糸巻き構造」はその信念の超過をも再び「糸巻き構造」のなかに還し入れることを要求する性格のものであろう。このことは「糸巻き構造」の着想がさらに練り上げられる余地があることを意味している。しかし、これらの点は論者の今後の研究の発展によって充足されてゆくものと考えられ、本論文の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2007年2月20日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。